

◆ 増水 ◆

子供の頃、梅雨の長雨により増水した川を眺めては「魚や生き物はどうしているのだろう...?」と不思議に思っていたことがあります。増水した川はまっ茶色に濁り、もの凄い勢いで流れています。このような中を魚は泳げるはずが無く、みんな海まで流されていってしまいそうですが、水位が低下して元の川の流れに戻ると、魚や生き物達は前と変わらず何食わぬ顔で復活しています。

こんな増水の時に生き物を守っているのは、川底の大岩や河岸の植物なのです。川の流れの勢いが強い時でも、岩の裏（下流）側や植物帯の根元は意外に穏やかな状態が保たれています。生き物達はこういった場所で、ただじっと身を潜めて水位が低下して川全体が穏やかになるのを待っているのです。ただ、川の形状が水路のように構造物も無く平坦であると、生き物はすがる場所が無く、あっという間に下流に流されてしまいます。そういった意味では、岩や植物等の自然のものだけではなく、橋の橋脚や、護岸保護のための異型ブロック等も十分に生き物の避難場所としての役割を果たします。

一方、この増水を繁殖のための機会として利用している魚もいます。ドジョウやナマズなどは、梅雨の増水の時に支流、水路をさかのぼって水田に進入し、水田の中で産卵します。天然記念物のアユモドキは、増水によってできた植生が繁茂する一時的な水溜りなどで産卵します。

このように河川環境の多様性は、生物に増水時の避難場所を提供し、その繁殖生態なども大きく関わっているのです。ただ、河川整備が過剰に進み、ずっと繰り返されてきた増水などの季節のインパクト、つまり「河川への刺激」が減ると、それを上手に利用してきた生物に影響が出る事も見逃してはいけません。



●アユモドキ



●ナマズ



●ドジョウ

環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works
池田 哲哉

水辺の博物誌



極彩色を纏った馴染み深い魚群

オイカワ *Opsariichthys platypus*

夏の盛り、淀川や流入河川でキラキラと輝く魚群と出会うことがあります。美しい婚姻色を纏ったオスのオイカワたちです。大きな尻ビレが特徴的で、カワムツと比較的近い種ですが、オイカワは比較的流れの早い瀬を好むのに対し、カワムツは流れの緩い淵と、競合する水域では棲み分けているようです。年配の方にはオイカワという標準和名ではなく、ハエやハヤといった地方名の方が馴染み深いのではないのでしょうか？ 以前はZACCO(雑魚)という属名で、ヌマムツやカワムツ等と一緒に括りにされていましたが、今は別属になっています。雑魚や雑草という名の生きものはいないということを、想い起こさせてくれる例といえるでしょう。(画/西山美月)



来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



上記コラム執筆者の池田さんが、大阪湾の魚類調査を行っているというので、採集した生物の種分け作業を見学させてもらった。琵琶湖～淀川は河川レンジャー間でもよく話題になるが、淀川～大阪湾の情報は少ない。捕れたてのエイやテンジクダイなど、川では見ることのない魚類を見るのは新鮮な

感じ。食用になる種がバットに並べられ、まるで魚屋のようであった。「森は海の恋人」という漁師さんの言葉は、海・川・山の生物の命のつながりを表している。海と川を行き来するアユのように、河川レンジャーも回遊すべきだと感じた。(編集長・石山郁慧)

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

カワムツ

Nipponocypris temminckii

コイ目コイ科カワムツ属の一種。本来の分布は、石川県・静岡県以西の本州、四国、九州でしたが、最近ではもともと分布していなかった東日本の地域からも確認されています。国外では朝鮮半島、中国、台湾でも知られています。河川の中・下流域の流れの緩やかなところに生息し、全長15cmほどに成長しますが、稀にオスでは最大で20cmに達する個体もいます。



以前は、本種とヌマムツが同種とされており、ヌマムツが「カワムツA型」、カワムツが「カワムツB型」と呼ばれていた時期があります。ですが、両種間では交雑がなく、側線鱗数や胸ビレ・腹ビレの前縁部の違いから、2003年に正式に和名が決まり、別種



となりました。

河川や湖沼などの水がきれいな流れの緩やかな所に棲み、岸辺の植物が繁茂しているような場所に多く生息しています。動物食の強い雑食性で、落下昆虫や水生昆虫などを捕食しています。産卵は5～8月で、流れの緩やかな浅瀬の砂礫の中に産卵します。あまり食用にはされていませんが、天ぷらや唐揚げ、煮つけなどにして利用する地域もあります。飼育は、比較的容易ですが、繁殖期などはなわばりが強く、大型の水槽が必要なことや落下昆虫を食べる習性から水槽外への飛び出しに注意が必要です。

under the water

花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館 主任学芸員
高田 みちよ

河川公園のタヌキ

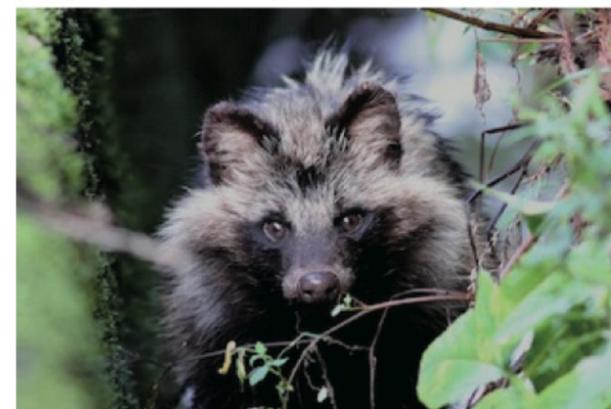
淀川にタヌキ?? 見たことのある人はほとんどいないのではないでしょうか。前号でご紹介したキツネよりも、タヌキのほうが淀川での目撃例は少ないと思います。

タヌキもキツネも、イヌの仲間です。歩くときは指の先で歩いている(かかとを地面につけない)ので、足跡では指が4本しか残りません。タヌキの足跡はネコに近く、梅の花のようなかわいい足跡が付きまします。よく似た姿のアライグマは足の裏をべったりつけて(かかとを地面につけて)歩くので、人の手の平、足の裏と同じ形の足跡になります。

里山にすむタヌキはよく人里に出てくるので、化かされた話など、たくさんの昔話が残されています。驚くと動けなくなってしまう性格から、狸寝入りという言葉もあります。しかしそれが災いし、道路を渡る際に車が近づくと立ち止まってしまう、交通事故が多発しています。また、イヌから伝染する疥癬という皮膚病から死んでしまうこともあります。人のすぐそばに昔から棲んでいたタヌキは、残念ながら珍しい生き物となりつつあります。

そんなタヌキですが、ひっそりと町中に居ついている家族もいるようです。淀川でも、ごく希に足跡を見ることがあります。みなさんもタヌキの足跡、溜め糞を探してみたいかたがでしょうか。

※参考 哺乳類のフィールドサイン観察ガイド(文一総合出版)



写真提供/池田哲哉
絵画提供/小村一也

the waterside

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

ヒラタカゲロウの仲間

川遊びが楽しい季節になりましたね。水の中を覗いてみると、今回ご紹介する、平べったい体で石の表面を活発に走り回るヒラタカゲロウの幼虫を見ることができます。

ヒラタカゲロウは、幼虫期を水中で過ごす水生昆虫です。幼虫は体長15～17mm、腹部の左右には大きなエラが複数あり、2本の尾毛があります。ちなみに、多くのカゲロウ類の尾毛は3本なので、同定する際のポイントとなります。河川の中流～上流域の瀬の礫帯に生息し、丸みのある石に多く見られ、礫の表面に付着する藻類を餌とします。本種は水質の指標生物でもあり、きれいな水域のスコア値9とされています。スコア値は1～10の10段階で、10がもっとも清冽な水域の指標です。

淀川では三川合流付近や木津川、桂川、宇治川、支流の安威川、芥川の瀬の礫帯で見ることができます。人が近づくと、石の裏に素早く逃げますが、石を持ち上げて、石の表面を丁寧に探してみると、容易に見つけることができますよ!



ヒラタカゲロウの幼虫



ヒラタカゲロウは成虫になると、上記のイラストのような姿となる。

礫の表面を走るヒラタカゲロウ



the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100

今年の6月、神戸港で国内初のヒアリが発見された。その後の周辺調査で、アカカミアリも確認。いずれも特定外来生物であり、毒性がある。もし見つけた場合は、近畿地方環境事務所(TEL 06-4792-0706)に連絡を。

■ヒアリ

南米原産、体長2.5～6mm。全体が赤茶色で、腹部が黒っぽい赤色。おしりに毒針があり、刺された場合にアナフィラキシー・ショックを起こす可能性がある。マウンド状の蟻塚を作る。大雨が降ると、仲間を集結していかだを造り水に浮いて移動するなど、拡散能力が高い。

■アカカミアリ

アメリカ合衆国南部から中米原産、体長3～5mm。全体が赤褐色で、頭部は褐色。ヒアリに比べて毒性が低い。

※参考 大阪府HP

AN INVADER

ヒアリ *Solenopsis invicta*

アカカミアリ *Solenopsis geminata*

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



ヒアリの標本



アカカミアリの標本



食べ物にたかるヒアリ



アカカミアリ vs アルゼンチンアリ

※アルゼンチンアリの詳細は2015年4月号をご覧ください。

写真提供/砂村栄力